

教育科学研究会通信

京都教科例会案内 364 号

6 月号



二条城周辺 神泉苑 から

日時 2023 年 6 月 24 日 (土) pm2 時～ (日程変更注意)

場所 西宮教育会館

内容 第 347 回 6 月京都教科例会と兼ねる

提起

教師 ほんとの仕事がなぜできない (仮題)

提起 高橋 哲氏 (大阪大学)

教師の仕事とは何か、今回は関西教科研の集會に合流します。
5 月例会の内容がさらに発展させられたらと思います。
みなさんの参加をおまちしています。

364 号目次

1, 6 月例会案内		1
2, 5 月例会報告	井上力省	3
3, わたしの研究ノート(27)	佐藤年明	7
4, 連載 (9) 永野耕作氏を偲ぶ	吉益敏文	12
5, 編集後記・ニュース		13
6, 関西教科研案内		
7, 資料 梶原誌	岸本清明	

京都教育科学研究会第346回5月例会の報告

はじめに

5月例会は教育5月号第1特集 教師＝専門職の誇りのありか について検討しました。
みなさんの問題意識を語っていただき、井上さんの問題提起のあと深めました。

提起

教師＝専門職の誇りにありか
教育 5月号 第1特集を読む

提起 井上 力省(事務局)

今後の例会予定

○6月例会 関西教科研に合流 6/24(土曜)西宮勤労会館 高橋哲講演
教師が本当にしたい仕事とは 別紙参照

○7月例会 7/15 7月号 第1特集 ことばの獲得 提起 寺井さん
特集の扱いは第1、第2変更あり(詳細は通信でお知らせします)

※8月以降の例会予定は7月例会で検討します。

◆特集予定

9月	第1特集	教育政策	第2特集	本雑誌	教育学
10月	第1	生徒指導		大学の学び直し	
11月	第1	勤務実態		子ども庁	
12月	第1	特別支援		「公立」のありかた	

大会予定

詳細は教科研HPを参照してください。

2023年8月8日(火)～8月10日(木)

形式 対面&オンライン

初日「教科研講座」・映画「プリズン・サークル」上映は対面のみ

会場 飯能市市民会館

9日 10日 自由の森学園中学校・高等学校

2023年6月10日(土) 不登校を聞き、考える 14時～17時 対面 オンライン

場所 スクール・ムーンライト Peatixによる事前予約制

※交流・討論は吉益の覚え書きです。正確さにかける点 ご容赦ください。

寺井： 専門職という言葉が キーワードのよう。中学高校の先生 街角の知識人のよう。
教師バッシングにより 権威性がはく奪された、いきどおりを感じた
教師とは、子どもが今 なにを感じているのかを敏感に瞬時につかむ仕事ではないか。

山田： 4月特集から感じたこと。楽しんでいくことの大切さを感じた。 発達障害の子がふえる中で
滋賀大 キッズカレッジの体験から大変さを感じている。一人ひとりが見える、これが教師の魅力
ではないか。

大西： 佐藤論文 現場の困難な様子が書いてある。 それぞれ頑張っているのだが言われたことをや
る教師がふえている。こうあるべし、土俵が違うように思う。若い人は教科書べったりだ。
2年生 長さの指導 4段階指導が定説だったが、即1センチとなっている。
悩ましい、タブレットを使うことにおわれている。モニターで説明 ICTに固執
これでAIがはいったら教師はいらないのでは。豊かな実体験をどう保障するのか。
1年専門の先生 さつまいもの掘り方わからない、見なかったことにしようと思う。自由さがな
くなっている。専門性 どう問うのか、主任という肩書を書くのかな？
多忙化の教師の実態がテレビに。無駄な事探し？におわれている気がした。

葉狩： 組合の会議の中で、大学院の学びの中で 専門性とは何かを考えている。 教師教育学会には
いる。何を報告するか、プールの民間委託が広がる 全国的に 大阪枚方市 京田辺市
水泳指導は絶対しなければならないものではない、水泳指導はそれなりにやりがいがあった。
働き方改革の中で民間にという流れが強まっている。専門性と水泳指導の関連 民間の流れをよ
しとするのか考えたい。そういう問いがうまれる。チーム担任制 京都市が試行 担任がいない
ローテーションでまわす。誰に相談してもいい、言いやすい人に相談したらいい。高学年だけで
なく低学年まで。これで、教師不足が解消できるのか、

渡部： 岩倉北小学校が宣伝されている。 娘 体育は学年でまわすようになった。専門職とは何か。
職場の担任団が変化 落ち着かない 管理職が一方的にきめるのでなくみんなで考えるべきだ。
2009年型教師論 実態からわかる気がする。職員会議 研究会が形骸化している。
アイパットの活用ばかりに追われている。これからどうなるのか。

野中： 妻の死から希望をどう見出していくか日々悩んでいる。現場の話が力になる。
生と死を考える教育を考えていきたい。

◆ 井上報告（報告の前にいくつか話題を提起されました）

親鸞展に参加して非常によかった。

大学の授業の中で

改憲案と憲法の比較 学生の感想から愕然とする。説明ぬきにはわからない。

以前の学生の意識と異なる。ウクライナ、ロシアから危機感

教員養成 減っている。1回生多いが上にあがるにつれて減っている。この現状をどうみるのか
考えている。

以下レジメ参照

特集「教師＝専門職の誇りのありか」『教育』2023年5月号

佐藤隆「『令和の日本型学校』と教師のゆくえ」5-13頁

(1) 中教審答申は説明責任を果たしたか

①2022年中教審答申

「『令和の日本型学校教育』を担う教師の養成・採用・研修の在り方について—『新たな教師の学びの姿』の実現と、多様な専門性を有する質の高い教師集団の形成」

- ・教師の専門性とはなにか
- ・教員の資質向上への努力義務を教員に課そうとしている

(2) 答申の本音

①教員不足をどうするのか

- ・教職課程科目修得の「軽減」措置
- ・教職実践演習の時期を各大学判断にまかせる規制緩和

②教職科目履修、免許状を取得する学生が増えない危機感

- ・小中免許の取得で教員不足の中での使い回し
- ・2018年教職課程に対する質保証（教員の資格審査、シラバス点検、教職課程コアカリキュラム）はなんだったのか

③特別免許状の活用、教職課程未修了者の採用…理系、英語、ICT、スポーツなど民間出身者を教員資格認定試験を通じて、多様な専門性を持つ人材としてリクルート

- ・戦後教育改革で確認された「大学において教員養成を行う」という大原則のひとつを揺るがしかねない
- ・教職課程をもつ大学に対して、内部質保証を求めてきたことからの大転換
- ・教員不足の現状を教育行政はどう捉えてきたのか
- ・教育学検討も皆無

(3) 答申は現実を直視しているか

①免許更新制度の発展的解消

- ・10年に1度の講習では子どもたちの多様化や社会の変化を踏まえることが難しいから
- ・「新たな教師の学びの姿」と整合的ではないから
教育行政の根拠が弱い

②教育委員会による教員研修履歴の記録、その当該履歴を活用した指導助言

教員研修における教員の主体性の問題

- ・1980年代、石田和男らの「恵那の教育」が教育行政と教員研修の課題を示していた
- ・強制による研修体制は、教師が「なんのために、なにを、どう」といった、考えることを失われた状態にする（石田）…教師の思考の退廃へと導く

③教師の専門性…自発的・主体的な不断の研修

・答申が示す「新たな教師の学びの姿」にかかわる研修をめぐる「対話」は対等なものでも主体的なものでもない。行政や管理職が求める教師としての職域・階層に対応する能力開発にすぎない

(3) 「多様な専門性を有する質の高い教職員集団の形成」の欺瞞性

①質の高い教職員集団とは

・「令和の日本型学校教育」が期する教職員集団
～個別採用されリクルートされた多様な人材と個別最適な研修、適材適所に配置された教職員からなるチームとしての学校

・A. ハーグリーブスが指摘する「仕組みられた同僚性」の特徴

～行政的に規制、強制されたもの。時間的・空間的にも管理され、予測可能な結果しか生みださない。行政と管理職が設定した目標に教師が従属させられる→教師の成長の余地がない。日本の教員文化「仲間」が育たない

②教員文化の破壊～教育行政の求めるチーム学校

- ・2000年学校教育法施行規則の改正・・・校長の権限強化と職員会議の形骸化
校長のリーダーシップの強化、副校長・主幹教員によるピラミッド型の指揮・命令系統
- ・教師の主体性を奪う

(4) 「理論の実践の往還」というが

答申「新たな教師（教職志望者）の学びの姿」を実現する上で、「理論と実践の往還」を強調

- ・一般論として正しいが、学校の現実をふまえているのか
- ・現状：教師の主体性・自律性・協同性が制約されている・・・マイナスイメージ
- ・教育実習での負の体験・・・教師の多忙さ、教師の資質能力体制下での教育実習生への指導
- ・教育学的知見を持って対処する必要がある

(5) 専門職の誇りを支えるもの

- ・答申は教師の置かれている現状を直視せず、教師の専門性についての洞察を欠いている
長時間労働の原因ほか
- ・答申には子どもの姿がみえない
- ・専門職の誇りをささえるものは、教師の主体性と「仲間」の存在

(論点)

- ・答申が示す「多様な専門性、質の高い教職員集団」とは
～多様な専門性への移行に伴う「教職の専門性」の放棄
- ・教育学的知見からの専門性～戦後教育学は「教職の専門性」をどう捉えてきたのか
- ・答申のもつ逆進性～免許更新制の発展的解消、多様な人材確保における教職の専門性の後退
- ・多様な専門性を有す人材に「教職の専門性」をどこで、どのように育てるのか
- ・教員養成系大学、教職員大学院、実務家教員登用、教育委員会と大学の連携強化
- ・教員研修履歴の活用
- ・その他

※井上さんはこのレジメと文科省のHPから答申の解説文を配布されました。

討論

- 大西： プールだけでなく宿題の委託も始まっている。働き方改革の一貫とか？
病んだ教師が塾の講師になっている。現場をささえてほしい思いもあるが。
- 寺井： 佐藤論文はこのひどさを怒っている。井上さんと同じように共感して読んだ。
破綻する。佐藤由佳さん 20年かけて 時間をかけて したたかに実践されている。
シカゴの教職員組合運動の経験 鈴木大裕 仲間を増やす。確信になった。
- 葉狩： 新転任歓迎のつどい 8時9時まで学校にいる 何をしてるかわからないが
み通しがなかったから、「いつでもやめる気持ち」色々聞いてもらって頑張れたと語っていた。
きいてもらえない 吐き出せない 2009 年型教師に通じるのでは。 学びの質をどうつくるか
現実を前にした学びをどう作るか 教師の喜びをそこに見出す事が必要では。
- 渡部： 教員の研修 自宅研修あったなあ、今は 管制研修のみ アイパット研修強制がある。
やる気が出ない 考えなくなっている。若い人いわない、仕事おしつけられるから。
言わない事で発展的解消している。 免許更新 何たることかと思う。 できることを語りつぐ
矛盾の中から希望をみいだす事が必要では。
- 山田： 教員のなりてがない。今の実態からすれば当然 まとはずれの答申と思う。
楽しむ感覚をどうするか 改善の方向がまるで違うと答申を読んで思った。
- 寺井： 教育費を増やさない 新自由主義の矛盾 献身的は改革の中心になっているか
マスコミは教員不足に言及するようになったが。

私たちが現場で仕事をしていた時と今の現場とは明らかに違う。今のほうが数倍いやそれ以上に大変になっている。安易な比較はできないし、今の現場や教員を否定したり自分たちの過去と比べても展望はでてこない。何より「教員不足」4月に担任がいらないという現状が全国的におこっている。世界でも例をみない教育費の少なさが現在の状況を生み出している根本原因といえる。中教審答申はその問題に正面から答えているとはとても考えられない。ただ教師像の記述に伴走者としての能力という一節がある。伴走者としての教師像にひとつの方向があるように思うのだが。

吉益敏文「生活綴方を実践する教師の『まじめさ』に関する考察——5人の教師の聞き取りから——」（武庫川臨床教育学会『臨床教育学論集』第14号 2022.12.10 所収）

【3回中の2回目】

佐藤 年明

第3節 学ぶことを大切に — C氏の語りと聞き取り

【Cは教師になって12年目。新任の時は初任者研修、とりわけ初任者担当教員との関係で悩みその後管理職からの「パワハラ」で休職を余儀なくされた。その後、教職員組合に加盟し、生活綴方で学ぶようになる。】（P.77 右段）

C氏は初任者担当教員の軋轢や管理職のパワハラにより休職を余儀なくされた後組合に加盟し、生活綴方実践に取り組んでいきます。C氏の聞き取り記録のうち、初任者担当教員の不当な振る舞いの部分について、酷い内容であるからこそ途中省略するわけにいかないと考えたので、全文紹介します。

【新任の頃に保護者に11時、12時までどなりちらされ、次の日学校にいけない時がありました。毎日のように新任担当教員から夜の8時まで指導されるのがつらかった。何かあると「準備不足」「指導力不足教員」といわれるので週1回だけのことなのですがおこられないように無駄なことはいわないようにしました。保護者との対応で私の味方になってくれましたがその他は信用しませんでした。とにかく怖かったです。指導教官は「しゃべるより、話を聞いてほしい」と思いました。私が授業してるときに勝手にチョークをとって介入してくるので、その場にいられなくなったことが何回もありました。学年の先生が配慮してくれて担当指導教官の来る日は行事などをあててくれて摩擦がないようにしてくれました。担当指導教官によっては他の職員にきかせたくない事はわざと小声でしゃべったり、自分の自慢話ばかりする人もいました。とにかく子どもがいやがっていました。保護者からも苦情を聞きました。しかし本人は全くわかっていない。担当指導教官というのは新任指導ではなく単なる説明責任の道具のように思います。なくてもいいです。結局は学年に助けてもらおうし、困った時に担当教官は何も助けてくれない。怖い、おこってばかりという印象がありました。】（P.77 左段-P.8 右段）

部外者である私が読んでも怒りに震えるような酷さです。初任者指導の方法や姿勢云々の遥か以前に人間としての基本的資質や倫理観を疑います。所属校でどうしようもない教員を辞めさせるわけにもいかず初任者指導に回しているのではないかと穿った見方をしてしまいます。

私はかつてあゆみ出版編集部・藤井誠二『ルポルタージュ これが初任者研修の実態だ！ ものいわぬ教師づくりへの道』（あゆみ出版 1988）で、吉益論文のC氏と同じように授業中の子どもたちの前で初任者指導教員に「介入」され、授業の方向を変えられた新任教師の経験談を読んだ記憶があります。もう手放してしまって手元にない文献なので詳細はわかりませんが、覚えている範囲では、やはり子どもたちの前で「能力のない教員」という評価をされることにより子どもたちや親との信頼関係が崩れたことへの当事者教師の悔しさが述べられていたと思います。

新任ですから未熟、能力不足はあたりまえで、だけど採用された日からクラスを任せ実践の場に出なければならぬ新任教員は、研修や先輩教師のアドバイスを受けながら On the Job Training で必死に力を付けていくわけです。もちろん、「学校生活の先輩」である子どもたちとか、「子育ての先輩」である親たちからも、基本的な信頼関係が成立していればさまざまな叱咤激励や支援を受けるでしょう。教師の仕事の中心である授業づくり・授業運営について、もちろん間違ったことを教えてはいけなし、教え方も日々努力して改善していく必要

があります。しかし、教師生活は長いのです。ある日の授業で教えたことの中に間違いがあったと後で気づいたら、翌日の授業で「ごめんね」と子どもたちに謝って訂正したらいいんです。板書がきたなかったりわかりにくかったら、放課後に練習して先輩教師に見てもらったりしながら少しずつ改善したらいいのです。授業への「介入」というのは、このような教師の仕事のタイムスパンの広がり・今後の成長可能性を無視して、「今、ここで、その指導の間違い・弱点を正す」という姿勢であり、しかもそれを授業運営の権限と責任を負っている担任教師を越権して強制するものです。それでいいのだと見なす人は、それが子どもたちのためになると考えるのでしょうか。しかし、いったい「正しい学習指導」というものは、具体的個人である教師と子どもたちの人格的交流を抜きにして成立するのでしょうか。「担任の先生は他の先生に授業のやり方が間違っているといって直された」という事実は、まちがいでなく子どもたちの記憶に残るでしょう。「もしかしたら担任の先生が教えていることがまちがいだということが、また起こるかもしれない。」と思う子どももいるでしょう。もちろん教師も間違えるものだし、間違った時には子どもたちにきちんと詫びて間違いを訂正しなければなりません。しかしそのことは、授業中に「他の先生」によって突然指摘される、という形で起こることが必要なのでしょうか。「介入」して「正しい指導」を強制した初任者担当教員はやがて去ります。そこからは担任教師が一人で学級を、授業を運営し、子どもたちとの人間関係をつくりあげていくことになります。「介入」＝新任教師の無能力の証明という《暴力》は、その後の学級づくりにどのようなプラスの遺産を残せるというのでしょうか？

さて、その後のC氏はどうなったのでしょうか。

【私は休職しましたが、そこで親身になって相談してくれた人は組合員の人が多かったです。組合の学習会で学ぶ教科の指導や教材研究は官制研修と違い本物のように思いました。学級通信を毎日のように発行している人がいて、その通信に子どもの日記や作文がたくさん掲載されていました。私もまねして実践してみると子どもたちが集中して読んでくれました。子どもたちの作文を読むのが今は楽しみです。そしてサークルにいて発表させてもらったりして学ぶようになりました。私の周りの若い男性教員は結果主義にとらわれていて「ほうれんそう（報告・連絡・相談）」と躍起になってあまり自分で考えていないように思います。私は組合やサークルで学び考える機会が増えました。最近では毎日のように組合事務所に行き、色々相談にのってもらっています。】(P. 78 左段－右段)

吉益氏は教師としての危機を乗り越えてきたC氏の語りを踏まえながらこう述べています。

【Cのような若い教員が一部の管理職や担当指導教官の「パワハラ行為」によって休職したり中には教師を辞めるという事例は少なくない。Cが語った組合やサークルとの出会いが危機的状況から脱出できた一つの要因ともいえる。もちろんC自身の努力が大きいですが教職員の超過勤務が社会問題となる中で、学校と家以外の場で教育観や子ども観を磨くことは大切な視点である。Cはサークルや組合の学習会の中で学び続けた。その視点と実践がCの生活綴方教師としての歩みとなった。】(P. 78 右段)

第4節 文集を作り読みあって －D氏の語りと聞き取り

【Dは定年退職して再任用になった。同期の仲間が再任用している事と教職員組合の専従を7年間携わったので「もう少し現場の仕事をしたい」という思いから退職後の進路を再任用とした。ここ数年2年生を中心に担任している。職場の年齢構成から最近では若い人と学年を組んでいる。】(P. 78 右段)

再任用で勤務しているD氏は、【生活綴方との出会い】(P. 78 右段)について語ります。

【最初に赴任した学校で先輩のNさんが勉強会を組織していました。(中略) N氏は小川太郎門下生で大阪綴方の会から学ばれていました。はじめは赤ペンで返すだけでしたが、「文集作らないと意味がないぞ」といわれました。今では自分から文集とったら何が残るかなあとと思うくらいです。子どものくらし生活は書かしてみてもわかる。リアルに丁寧に知る。ずっと続けてきました。研究会などで学び、子どもの見方、子どもってどういうふうに見るのか、子どもは自分で育つという事を学びました。先生が子どもをどうしよう、こうしようとすべきではない。様々な先生をみて、そういう視点で自分の力で子どもが変わったと思う人がいるがおかしいと思い、違和感を感じていた。(中略 引用者註:この後に5・6年を担当した女の子の事例が出てくるのですが省略します。) ああ、こういう事書いてるな、と読むことでその子らしさを感じます。その子にとっても読ましてもらう自分にも意義がある。それを読みあい伝える。それが子どもどうしをつないでいるのではないかと思うようになりました。】(P. 78 右段-P. 79 左段)

生活綴方実践を続けてきた立場から、D氏は現在の学校の状況についてこう語ります。

【若い人たちの中には文集というか通信を出している人がいますが、何のためにだしているのかと疑問に思うことがあります。文集なり通信の中味が全然ちがうからです。めあてに沿って書かすというか。教師の考えにそった作文を書かせ、それを掲載するのですね。そういう実践をしていた人のあとに私が担任しました。母親から「ずっと書く力がない」といわれていました。「先生の文集はめちゃいいですね。」「子どもの拙さがそのままです。」と言われたことがありました。書く力はめあてにそって書かせたからできるというものではありません。私はそのお母ちゃんに「拙い文かもしれんけどその子の一生懸命さがでますよ。その姿勢が大事ですよ。」といました。やっぱり子どもの自己表現でないといけない。書いた子が書いてよかったといえるようにならないと。みんなで読みあってよかったといえるようにならないと。自分の書きたいものが大事なのではないかと考えています。】(P. 79 右段-P. 80 左段)

さらに、こう語ります。

【子どもは未分化だからこそ一懸命生きている。そこをまず認め、子どもに対して謙虚でなければならない。子どもを調教するのではない。子どもをバカにしてはいけない。周りがどんなものかわからない、不安ゆえに必死に生きる。それが子どもだと思のです。確かに自分が担任して、この子は変わったと思う時はありますが、それは子ども自身がかわったのであって、担任の力でかわったのではないのです。子どもがかわったというスタンスを大事にしたいです。】(P. 80 左段)

教師として子どもから学ぶこと、子どもが変わるのであって教師が子どもを変えるのではないこと。鹿島先生、西條先生とも共通する基本姿勢だと思います。

吉益氏は、次のようにコメントしています。

【Dの語りから第1に子どもの自己表現を大切に。そのために文集を作り続けてきた。第2に生活綴方は子どもをどうみるのか、子どもとは何なのかを常に問うている。教育とは何かをいつも考えている。第3に子どもの前で謙虚でありたい。子どもは子ども自身で伸びるのである。教師はその支援をしているので子どもが教師の力で変わったと思いがあがるのは調教と同じだ。(もちろん 私が子どもとかかわったという事に小さな自信と誇りはある) 以上の3点が明らかになった。生活綴方実践は教師の成長にどのような影響があるのか、Dの今までの歩みと現実の姿に体現している。】(P. 80 左段-右段)

第5節 書く事・読みあうこと — E氏の語りと聞き取り

【Eは定年退職をして再任用となった。再任用となった動機と生活綴方との出会いと生活綴方を学び、実践してきた要因を次のように語った。

小学校担任として、中高学年が多かったです。教務も特別支援など全て担当しました。現在は再任用3年担任、単級16人 全校120人 20人規模の学級に勤務しています。現場から教育について発信したいので再任用となりました。】(P. 80 右段 引用者註：Eさんについては吉益氏の紹介文が短いのでインタビューの冒頭部分で補いました。)

E氏も再任用で勤務しています。生活綴方と出会い、学んできた過程を以下のように語っています。

【自分の新任の頃から多くの方が学級通信を発行していました。それが普通でした。同じようにまねていました。(中略)学級通信で 子どもの姿を知らせる。本音が語られる。そのゆったりした感じが 面白いのです。魅力です。子ども理解と接近するように思います。1枚文集 読みあう事を続けています。授業中に書かしています。授業記録日記風に書かしたりしています。学期末に先生のインタビュースタイルで書かしたりしています。自画像に語りかける実践も展開しています。運動会のあとに書かしている時もあります。教師は子どもの抱えているものは簡単にはわかりません。でも知っているのと知らないとの違いは大きいです。だから子どもの作品から考えています。臨床教育学の観点から書くことで癒しになるのではないかと考えています。昨年の実践ですが、よみあうことのできない作品もありました。卒業前 コロナ禍のやりきれなさ そうした背景から生まれたように思います。以前はどの先生も学校でやっていました。土壌がありました。今は単年勝負です。文集など発行している人はほとんどありません。積み上げがありません。自分は広げるためにはみなに知らせるようにしています。文集を職場の仲間に配っています。たわいにない作文 おもしろいという反応もあります。かといって広がらない現実もあります。お互いの生活を知りあうことが大事だと思っています。「ああそういうことをかくだ」書くべきことを見つけるなどです。読みあうことの意義はそこにあると思います。基本は自分のために書く読みあう知りあう人の事を知るために自分も知ることにつながっていると思います。積み上げが大事です。評価にしばられないで、知る喜び成績につながらない事が大切だと思います。「切れる子」が自分なりの「反省文」を書いてきました。その子の正直な気持ちをすることになった。読みあう意義はこんな所にもあるのではないかと考えています。コロナ禍の今では休校中のお互いを知る。集まれば楽しいな。拙い文章でも自分の思いを書くことに意義がある。渾身の力で野球の事を書いたこがいました。その文章の熱い思い その子の表現 学力といえないかもしれないが、喜び書けたという満足感を感じました。子どもたちがどんな言葉を創り出すか楽しみです。】(P. 80 右段-P. 81 左段)

またE氏は、サークル運動や組合運動に取り組んできた経験を踏まえながら、現在と学校現場と特に若い教師たちへの期待を次のように語ります。

【(前略)今の現場は形式的な文章をよしとする傾向が強いです。学力テスト体制が今の学校にはあります。その縛りは大きいです。しかし、多くの先生の笑い喜びは子どもとの関係が基礎です。そこにつながっていくことが大事なのではないでしょうか。そこに信頼をもちたいです。若い人たちは生活綴方についてほとんどしりません。けれど、意義がわかると学ぶ大切さをしります。徐々に学んでもらったらいいのではないかと思います。自分としては色々学びそこで自分の実践を展開する。クリエイティブな活動を創り出す大切さ、地域にできることを大切にしたいです。若い人たちの中にあるしぼりの強さは 画一的な世代で自分たち以上のものがあると思います。若い人たちを信頼すること、一緒に学ぶ視点が大事だと思います。】(P. 81 右段)

吉益氏は、E氏の語りについて次のようにコメントしています。

【Eの語りは、生活綴方を子どもに書かせ、それを読みあうことでお互いを知り、子どもの理解を深めていった事、その空間 楽しさが持続している原点にある。サークルや組合活動を通して仲間に支えられ励まされて、苦しい時も乗り越えてきた。複眼的にものごとを考えられるようになってきた。若い人たちへの現在の「学力テスト体制」のしぼりは大きい、学べば真実をしっていけば必ず若い人たちもゆっくり変化していくという確信が感じられた。現実をみつめ学び自分の頭で考えはじめてクリエイティブな実践の創造がうまれると語った。】

(P. 81 右段-P. 82 左段)

第2章 5人の語りから明らかになったこと

吉益氏は、勝田守一「子どもの幸福をまもる教師たち」(1952)の一節を引きながら【鹿島、西條、C、D、Eの生き方は、この勝田の指摘に当てはまる】(P. 82 左段)とした上で、5人の教師たちの歩みの特徴を次の3点にまとめています。

(1) 生活綴方を実践の核に位置づけ子ども理解を深めた。

詩や作文など方法は様々だが生活綴方の思想に学び教育実践を展開する。そこから子ども理解を深めた。

2) 子どもの自己表現を大切に、子どもの成長・発達・自己の育ちを信頼する。

子どもの作品のできばえより自己表現に注目し、そこから子どもの内面を理解しようと努力した。そして子どもの成長を丁寧に見守る。子ども・若者に対する深い信頼がある。

3) 子どもの前で誠実さを貫いた。

同時代に共に生きる同伴者としての対人援助職の立ち位置を堅持し、子どもと誠実に対峙した。

様々な「権威」や圧力に屈せず、子どもの前に謙虚であった。】(P. 82 右段)

そして吉益氏は、【では、教師の誠実さ、「まじめさ」とはどういうことなのか。】(P. 83 左段)と問題を立てます。

(つづく)

佐藤さんは私の書きたかった事を的確にまとめ論評してくださった。ありがたいことです。生活綴方教師だけが「まじめ」であるということではないが、5人の方の聞き取りから、子どもの前で謙虚であること、誠実であるという意味を再認識した。子どもと共に生きる教育実践とはどういうことか、という問いにもつながる。同時に時の権力や権威に対してどういう立ち位置をもつかということも問われているように思う。

永野耕作さんを偲ぶ

吉益 敏文

京都教科研の第1回例会にゲストとして参加していただいた永野耕作さんが、この5月8日に91歳でなくなられました。いぶし銀のような語りとなたずまいをされていた永野さん、謹んでご冥福をお祈りいたします。永野さんを偲ぶ意味をこめて、第1号、2号通信を採録します。

○対談 永野耕作氏（元長岡第9小学校教諭）私にとって教師人生とは
聞き手 乙訓「読者」の会 1992年5月7日（例会は6月9日）

となっています。（第1号）私は同じ職場でお世話になった永野氏が退職されたので、お話しを伺ったと思います。教師として退職するまで子ども仲間とともに歩む。当たり前のように、なかなか難しい課題です。「どんなに反動の力が強くて心まで支配できない」35年の教師生活を終え退職されたときに語られた言葉でした。永野さんのような教師になりたい、そう思って対談をお願いしました。2号を再録します。

教師として生きる（6月例会報告）

6月例会は対談形式で永野耕作氏を招いて話し合いました。大学の講義を終えて野中一也代表もかけつけて下さいました。永野氏は学力テストの強行のなかで職場が分裂されていった事、その中で単にテストがおこなわれたかどうかで総括するのではなく権力の本質をどれだけ見抜き、団結を固めたかが大切である事、組合活動が自分にとって民主主義の学校であったと始めに話されました。2つめに「民主的管理職」をめざすといって組合を脱退したり、少しばかりの実践を行政から天までもちあげられて若いのに早くから上を向いたりする傾向については、それぞれの生活だからと前置きされながら、自らの良信にそって信念をつらぬく事の意義を力説されました。

今の情勢と関連しながら「校長＝敵」論の間違いを指摘されながら、子どもや職場に見向きもしないで己の出世や組合破壊に奔走している一部の「管理職」の動きについては冷静にみておくことも付け加えられました。

自分自身の生き方については、数多くの失敗から少しずつ確立していった事、不当な動きについては機敏に反撃する事、良信に従って生きるなら、時として沈黙もあるはずである、過去の言動や行動を顧みず、節操がない生き方はしたくないと静かに語られました。およそ1時間ばかりの対談でしたが、教師として生きる、人間としてどう生きるかを考えさせられました。

野中代表は感想として学習の大切さ、生き方を確かなものにするために羅針盤を持つこと、常にストレスがたまらないようにリフレッシュする事などを最後に話されました。

職場の「多忙化」、教育の原理からはずれた「押しつけ」が続く中で、永野耕作氏の生き方は私たちに大きな励ましを与えてくださいました。あせらず あわてず歩みたいと思います。

「すぐに反対できなくても、時に沈黙は反対になると思って対処したよ（要旨）」この言葉が印象に残っています。柔和な笑顔に何度も励まされました。

次回は井上さん（予定）

読書・映画・DVD・CD情報（趣味的ですいません）

- ① 「発達」を問う 浜田寿美男 ミネルヴァ書房
発達とは何なのか、著者 自らの著書をふりかえり修正も加えながら、発達についてあらためて問う書。発達障害との関係、発達心理学の課題 特別支援学級のありかたなど問題提起が鋭い。
- ② 子どものなかの未来をつかむ 佐藤廣和 文理閣
研究者として、佐々木昂研究、フシネ研究 愛知私教連研究の3つのかかわり、学んだ軌跡を具体例をかかげて説明する。著者の真摯な歩みの姿がかいまみえる。
- ③ キングメーカー 本城雅人 双葉社
政権を裏であやつる「政治記者」の姿を若き記者が暴いていく。実在の政党の姿を思い出させるような本城の筆の運び。作家が元新聞記者だけに緊迫感がある。
- 妖怪の森 監督 内山雄人 2023
亡くなった安部首相を動かしていた「原動力」は昭和の妖怪と言われた岸信介。政治ドキュメンタリーは国会中継の実写をはさみながらその暗部に迫っていく。

編集後記・よもやま話

※今回は「教師の専門性」について井上報告から深めてみました。現場の教師を取り巻く現実をみると明るい展望がでないのだが、だからといって AI を活用すれば教師がいらないのかということそうはならない。参加者の発言の中に、佐藤研究ノートの中に、亡くなられた永野さんの言葉の中にそのヒントが隠されているように思います。安易に昔はよかったではなく過去に学びながら今の改革と未来についてあせらず考えていきたいです。小さな展望に確信をもちながら、6月関西教科研の学びにつなげたいです。

※「広島サミット」の「成功」にうかれて政治の世界は解散ムード。庶民の思いは毎日の生活の安定を願うが今の政治に満足しているわけではない。不満があきらめに終わらないように要求をくみとり思い、願いを束ねていきたい。そういう政治が望まれているとおもいます。戦争と平和、岸本氏から貴重な資料・梶原誌をいただきました。

※相撲の横綱 照ノ富士の復活優勝。この人の精神力の強さに励まされます。地獄をみた人の境地はすごいです。新しい大関候補や失敗からはいあがる力士の姿に共感を覚えます。大相撲の活気が。力士の体のサポートをもっとしてあげてほしいと思います。

※5月 阪神タイガースが好調です。どこまで続くか不安はありますがさわやかな季節とあいまって気分がいいです。ずっこけに事を願います。今年は植物の花の開花がはやいですがどれも綺麗にさいているのもうれしいかぎりです。6月 お身体ご自愛ください。